The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	他者表情が変化する場面における高対人不安者の表情認知
Author(s)	落合, 萌子; 松井, 豊
Citation	対人社会心理学研究. 2009, 9, p. 45-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5478
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

他者表情が変化する場面における高対人不安者の表情認知 1)

落合萌子(筑波大学大学院人間総合科学研究科)
松井　豊(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

本研究は、コミュニケーション相手の表情が変化する対人場面における、高対人不安者の表情認知を検討することを目的とした。女子大学生 43 名を対象に実験を行い、実験協力者に対して 3 つのテーマについて自己紹介を行うように求めた。実験参加者が自己紹介を行っている間の実験協力者の表情を、1 つ目のテーマでは中性表情、2 つ目のテーマでは否定表情、3 つ目のテーマでは肯定表情と変化させた。1 つのテーマが終わるごとに、相手の感情の認知と自身に生じた感情の程度を測定した。その結果、高対人不安者と低対人不安者との間に、相手や自分の感情の程度の差はみられなかった。しかし、否定表情の際に認知した相手の否定感情が、肯定表情の際に生じる自身の感情に与える影響については差がみられ、低対人不安者では肯定感情を、高対人不安者では否定感情を、それぞれ促進していた。本研究の結果から、高対人不安者が好転を受け入れにくいことが示唆された。

キーワード: 対人不安、表情の変化、表情認知、感情

問題

本研究は、コミュニケーション相手の表情が変化する対人場面において、対人不安特性の高さが表情認知に与える影響を検討することを目的とする。

対人不安は「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」(Schlenker & Leary, 1982)と定義される。対人不安については、その個人差を扱う研究が多くみられる(e.g., 佐々木・菅原・丹野, 2001)。本研究では、対人不安の感じやすさの程度を対人不安特性と表記し、対人不安特性の高い個人を高対人不安者、低い個人を低対人不安者と表記する。

高対人不安者の対人関係

高対人不安者は主観的にも客観的にも、良好な対人関係を築くことが困難である。例えば、対人不安特性の高さは他者からの主観的な受容感の低さと関連し(La Greca & Lopez, 1998)、仲間からの客観的な受容の程度の低さや、いじめられやすい傾向とも関連することが明らかにされている(Greco & Morris, 2005; Walters & Inderbitzen, 1998)。

高対人不安者が対人関係に問題をもつ原因の 1 つとして、対人場面における高対人不安者の解釈バイアスの存在が挙げられる。

高対人不安者の解釈バイアス

対人不安に関する理論モデルでは、否定的な解釈バイアスなどの対人情報処理におけるバイアスが対人不安の生起や維持を引き起こしていると理論化している(Clark & Wells, 1995; Rapee & Heimberg, 1997)。解釈のターゲットとして対人的なシナリオを用いた研究は、一貫してこの理論を支持している。例えば、Amir, Beard, & Bower(2005) や Amir, Foa, & Coles(1998)は、高対人不安者が低対人不安者と比べ、あいまいな対人シナリオに対して否定的な解釈を行うことを明らかにしている。また、やや否定的な対人シナリオに対しても(Lucock & Salkovskis, 1988)、肯定的な対人シナリオに対しても(Alden, Taylor, Mellings, & Laposa, 2007)、それぞれ高対人不安者が否定的な解釈を行うことが明らかになっている。

このように、対人場面において否定的な解釈をしがちであるという高対人不安者の認知傾向は、実際の対人関係にも悪影響を与えることが指摘されている(Clark & Wells, 1995)。例えば、実際には対人的な脅威がない対人場面にも関わらず、他者からの嫌悪や拒否を認知することにより、その相手に対して視線をそらすなどの不自然で否定的な行動をとり、その行動によって、その相手から否定的な評価を受けることが指摘される。

高対人不安者の表情認知に対する解釈バイアス

かつての高対人不安者における解釈バイアスの研究では、刺激として対人シナリオのテキストが示されることが多かった(e.g., Amir et al., 2005)。しかし最近では、刺激として表情を用いた研究がなされている。

表情は重要な対人情報を示すため、表情認知を検討することは高対人不安者の不適応の原因を理解する上で重要である。

しかし、対人不安特性の高低と表情認知との関連については研究間で結果が一貫していない。例えば、Melfsen & Florin(2002)や Mohlman, Carmin, & Price(2007)は、対人不安特性の高低によって他者表情への評価が異なることを明らかにしている。Melfsen & Florin(2002)は、表情刺激として表情を写した写真を用い、対人不安を主訴とする障害である社会不安障害の子供は社会不安障害ではない子供と比べて中性表情の正

答率が低いことを明らかにした。Mohlman et al.(2007)は、表情刺激として顔の絵を用い、社会不安障害者は社会不安障害ではない人に比べて中性表情から否定感情を読み取ることを示している。一方、Philippot & Douilliez(2005)や Merckelbach, Hout, Hout, & Mersch(1989)は、対人不安特性の高低によって、他者表情への評価が異ならないことを明らかにしている。両研究は表情刺激として表情を写した写真を用いて実験を行ったが、社会不安障害者と社会不安障害ではない人との間に他者表情への評価の差を見出していない。

こうした高対人不安者の表情に対する解釈バイアスを検討した先行研究には結果の不一致はみられるものの、いずれの研究も「表情の変化」を扱っていないという問題点が挙げられる。

表情の変化

数分の短い会話場面でさえ、人は何種類もの表情によって様々な感情を表現し、コミュニケーション中に表情は絶えず変化する。ある表情を示された際の認知はその前の表情の影響を受けると考えられるが、この影響の度合いには個人差があると推測される。また、ある表情を示された際に感じた相手や自分の感情が後に示された表情から感じる感情に与える影響にも、個人差があると推測される。表情が変化する場面におけるこれらの個人差は日常のコミュニケーションに影響を与えていると考えられる。

しかし、多くの先行研究では実験刺激として表情の変化が生じない表情写真が用いられている。例えば、Melfsen & Florin(2002)の実験では実験参加者は表情写真が提示される度に評価を行い、各表情に対する認知の傾向は表情の種類ごとに表情写真に対する評価を得点化することによって測定されている。この方法によれば、表情の種類ごとの評価や表情全般に対する個人の表情認知の傾向を明らかにすることはできる。しかし、表情の変化が生じる対人場面における表情認知については検討できない。したがって従来の研究では、対人不安特性と表情の変化が生じる対人場面における表情認知との関係について、明らかにできていないと考えられる。

そこで本研究では、対人不安特性が表情の変化を含んだ対人場面における表情認知に与える影響を検討する。具体的には、表情が変化する場面を設定するため、コンピュータを介したコミュニケーション場面を用いた実験を行う。コミュニケーション相手の表情は、コミュニケーション中に中性表情から否定表情(しかめ面)へと変化させ、その後さらに肯定表情(笑顔)へと変化させる。そして、それぞれの表情を示された際に、認知した相手の感情についての回答を求める。対人不安特性の高低別にこの評価や評価間の関係を比較し、高対人不安者の表情認知における問題点を明らかにする。

中性表情は事前水準の測定のために用いる。また、相手が肯定表情を示しているにも関わらず否定表情と誤って受け取ってしまう場合のほうが、相手が実際に否定表情を示している場合よりも、相手の感情に対して否定的な評価をすることが不適切であると考えられる。そこで、本研究では、否定表情から肯定表情への変化場面を用いる。

本研究では、否定表情としてしかめ面、肯定表情として笑顔を用いる。したがって、測定する相手の感情は「イライラ・怒り」と「うれしい・楽しい」とする。

高対人不安者の感情

本研究では、高対人不安者が対人関係に問題をもつ原因を、他者感情に対する否定的な認知の歪みにより対人場面において不適切な反応をしやすいためであると推定している。この場合、他者感情への否定的な誤解は、相手への不適切な反応を直接的に生じさせるだけでなく、高対人不安者自身の状況に対応しない否定的な感情状態を媒介して、相手への不適切な反応を間接的に生じさせることも予測される。例えば、会話相手が怒っていると誤解した場合、会話相手が楽しく話をしていても、「楽しい」という感情を抱けず、固い表情で黙り込んでその場の雰囲気を悪くしてしまうことが考えられる。すなわち、他者感情への否定的な誤解によって生じた高対人不安者自身の状況に対応しない否定的な感情が、相手への不適切な反応に結びつくと予測される。したがって本研究では、高対人不安者の否定的な他者感情と不適切な反応とを媒介する変数として、表情を見た際の自身の感情についても検討する。測定する自身の感情の種類は、本研究で測定する相手の感情の種類とあわせ、「イライラ・怒り」と「うれしい・楽しい」とする。

本研究の目的と仮説

本研究では、表情が変化する場面における高対人不安者の表情認知を検討することを目的とする。

コミュニケーション相手の表情が中性表情から否定表情、肯定表情へと変化した場合、肯定表情時点の相手の感情の認知や自身の感情は、一般的には中性表情時点や否定表情時点よりも肯定的になると予測される。しかし、高対人不安者は低対人不安者と比べて被害妄想的観念が強いことが明らかになっている(金子・本城・高村, 2003)。また、否定的な対人刺激に対して注意を向けやすく(Mogg, Bradly, & Philippot, 2004)、否定的な評価を正しいと感じやすい(調・高橋, 2002)。そのため、コミュニケーション相手の表情が否定表情から肯定表情へと変化した場合、高対人不安者は、否定表情を示されたことを手がかりにして、肯定表情時点においても被害的な意識が増すとともに、肯定表情を示されたことよりもその前

に否定表情を示されたことに対して注目しやすいと考えられる。したがって、低対人不安者は中性表情時点よりも肯定表情時点のほうが相手の感情の認知や自身の感情が肯定的であるが、高対人不安者はより否定的になると予測される(仮説 1)。

また、相手の否定表情から肯定表情への変化を「好転」であると捉えた場合、否定表情時点において認知した相手の感情が否定的であるほど、肯定表情時点においては相手の感情が肯定的になったことに対して自身は肯定的な感情を抱くと考えられる。しかし、高対人不安者は低対人不安者に比べて肯定的な対人状況を素直に受け入れず、疑いをもちやすいことが明らかになっている(Alden et al., 2007)。そのため、高対人不安者は否定表情から肯定表情への変化を「好転」と解釈しないと考えられる。したがって、低対人不安者では、否定表情時点における相手の否定感情の認知の強さが肯定表情時点における自身の肯定感情の強さに影響するが、高対人不安者にはそのような傾向はみられないと考えられる(仮説 2)。

方法

実験の概要

実験参加者に実験の説明をした後、対人不安尺度への回答を求め、その後、コミュニケーション相手の表情が変化する会話実験を行った。会話実験は、実験参加者とコンピュータのディスプレイの中の人物(コミュニケーションの相手)とが、3 つのテーマについて 20 秒程度の自己紹介を交互に行う形式であった。会話実験終了後、デブリーフィングと実験の操作チェックを行った。

実験参加者

実験に参加したのは、茨城県内の国立大学の女子学生 43 名であった。実験参加者は、講義時間中および個別に実験参加の説明および募集を行い、自発的に連絡先を記入した学生に対して、その後電子メールを用いて改めて依頼を行った。

全実験参加者 43 名のうち、会話相手(表情刺激)に実験協力者が用いられていることに気づいたり、あらかじめ録画した映像が用いられていることに気づいたりした実験参加者を分析対象から除き、最終的に 39 名が分析対象となった。

実験条件

実験条件は、2 × 3 の 2 要因混合計画であった。対人不安特性の高さを参加者間要因とし、対人不安高群と対人不安低群の 2 水準を設定した。また、提示表情を参加者内要因とし、中性表情・否定表情・肯定表情の 3 水準を設定した。

実験刺激

自己紹介のテーマは、1 回目(自己紹介①)は「どの学部に所属し、そこで何を学んでいるか」であり、2 回目(自己紹介②)は「趣味は何か」であり、3 回目(自己紹介③)は「最近うれしかったことは何か」であった。

以上の内容に沿って、表情刺激を作成した。

表情刺激は、表情を映した静止画像が 1 秒おきに入れ替わる音声入りの映像であった。

表情刺激の作成にあたっては、まず動画を撮影した。撮影には、Logicool 製 Web カメラ(Qcam Fusion(QVX-13S))を用いた。表情刺激の提供は、映像系サークルに所属している女子大学生(22 歳)に依頼した [2]。表情刺激の提供者に対して、実験の趣旨や演技の内容(自己紹介の内容やそれぞれの表情、評定中の様子)を説明した後、映像と音声の撮影と使用の許可を得て、動画を撮影した。その動画から静止画を取り出し、1 秒おきに静止画像が変化する映像を作成した [3]。

映像は、相手(表情刺激)と実験参加者が交互に自己紹介し、お互いにその際の相手や自分の感情を評定する場面を表現できるよう構成された。映像の内容は、まず相手が自己紹介を行い、次に相手が実験参加者の自己紹介を聞き、その後に相手が質問紙に回答するという流れが、3 回繰り返されるものであった。相手が実験参加者の自己紹介を聞いている際に示す表情が参加者内要因であり、自己紹介①では中性表情、自己紹介②では否定表情、自己紹介③では肯定表情であった。相手自身が自己紹介を行う際や、質問紙に回答する際の相手の表情は、すべて中性表情であった。

表情の選定は、筆者ら 2 名が行った。また、大学生 2 名に対して予備実験を行い、中性表情、否定表情、肯定表情それぞれについて、表情刺激を選定した。具体的には、作成した表情刺激の映像を提示し、自己紹介①・②・③における表情刺激がそれぞれ「笑顔」と「しかめ面」、「無表情」のうちどれに該当するかを尋ねた。そして、2 名ともから、自己紹介①に対しては「無表情」、自己紹介②に対しては「しかめ面」、自己紹介③に対しては「笑顔」という回答を得た。さらに、映像の内容が「実験協力者との実際の会話」として自然なものになるように、表情の強度や表情の変化のタイミングなど、不自然な部分の指摘を求め、それをもとに相手の表情の調整を行った。

手続き

実験は個別に行われた。

実験室に入室した実験参加者は所定の椅子に着席した後、実験者より実験の説明を受けた。実験説明においては「お互いの表情が見える CMC の効果を調べるためのものであり、もう 1 人の実験参加者との会話を行う」という趣旨の説明がなされた。実験全体の説明の後、実験参加者は参加同意書に署名をし、対人不安特性を測定す

る尺度(Social Avoidance and Distress Scale の日本語版(石川・佐々木・福井, 1992)を使用、以下 SADS と表記)に回答した。回答後、会話実験の説明を受け、会話実験の準備として 20 秒程度の自己紹介の内容を大まかに考えるよう求められた。自己紹介の内容を考えるためにメモが必要な実験参加者は、会話実験中はメモを見ることはできないという教示を受けた上で、メモを取った。準備終了後、会話実験を開始した。実験中の実験参加者の様子は、実験参加者の同意の上で録画された。

映像内の相手(表情刺激)が自己紹介①を行った後、実験参加者も自己紹介①を行い、その後、会話実験中の尺度へと回答した。会話実験中の尺度の内容は「相手の表情の種類の認知」、「相手の感情の認知」、「自分の感情」であった。実験者は、実験参加者の自己紹介や尺度への回答が終わり次第、不自然にならないようなタイミングで、映像を次の映像へと切り替えた。同様に自己紹介②・③を行い、会話実験を終了した。

会話実験終了後、実験参加者はデブリーフィングを受け、実験の真の目的や映像について説明を受けた。その後、実験後の質問紙への回答と最終同意書への署名を行った。実験後の質問紙の内容は「相手(画面)を見ることができていたかどうか」と、「相手が実験協力者であることやあらかじめ録画された映像であることに気づいていたかどうか」、「実験の意義について理解したかどうか」、「実験の感想」、「基本情報(学年・年齢・学部)」であった。すべてに記入後、実験参加者は謝礼品を受け取った。

測定変数

対人不安特性 実験参加者の対人不安特性の強さを測定するため、SADS の 28 項目のうち、第 1 主成分に負荷の高い項目 12 項目[4]を抜粋し、使用した。回答は「全くあてはまらない」、「ややあてはまらない」、「どちらでもない」、「ややあてはまる」、「とてもあてはまる」の 5 件法であった。

会話実験中の尺度 それぞれの自己紹介の後に、SADS と同様の 5 件法によって、以下の尺度へと回答を求めた。

1. 相手の表情の種類の認知 自己紹介中の相手の表情の種類について尋ねた。「笑顔」、「しかめ面」の 2 項目であった。

2. 相手の感情の認知 自己紹介中の相手がどのような感情を抱いていると感じたかについて尋ねた。「楽しい」、「うれしい」、「イライラしている」、「怒りを感じている」の 4 項目であった。

3. 自分の感情 自分が自己紹介中にどのような気持ちであったかについて尋ねた。項目は相手の感情の認知と同様の 4 項目であった。

結果

対人不安特性による群分け

対人不安特性尺度(SADS)について、1 点(全くあてはまらない)～5 点(とてもあてはまる)に得点化した後、主成分分析を行った。すべての項目が.40 以上の負荷量を示していたことから、1 次元構造であることが確認された。さらに、α 係数を算出したところ.89 と高かった。そこで、項目得点の平均値を算出し、尺度得点とした。

続いて、落合(2007)における SADS の平均値(3.21)に基づき、本実験における対人不安尺度(SADS)の得点が 3.21 よりも高い実験参加者を対人不安高群、3.21 よりも低い実験参加者を対人不安低群に割り当てた[5]。群分け後の人数は、対人不安高群が 17 名、対人不安低群が 22 名であった。

実験刺激の妥当性の検討

表情刺激の妥当性を検討するために、相手の表情(笑顔・しかめ面)の認知に関する尺度得点について、提示表情(否定表情・中性表情・肯定表情)を要因とした 1 要因 3 水準参加者内計画分散分析を行った(Table 1)。分析の結果、笑顔・しかめ面ともに、要因の効果が有意であった($F(2, 76) = 92.27$, $p < .01$; $F(2, 76) = 53.69$, $p < .01$)。

Table 1 中性表情・否定表情・肯定表情における刺激人物の表情に対する評価の比較

		中性表情	否定表情	肯定表情
笑顔	*n*	39	39	39
	平均	2.38	2.15	4.31
	標準偏差	0.95	0.98	0.72
しかめ面	*n*	39	39	39
	平均	2.85	3.51	1.56
	標準偏差	1.03	1.17	0.71

註: HSD 法による多重比較の結果、5%水準で笑顔では、中性表情 = 否定表情 < 肯定表情となった。しかめ面では、肯定表情 < 中性表情 < 否定表情となった。

多重比較(HSD 法: 5%水準)の結果、笑顔認知の尺度得点に関しては、中性表情や否定表情に比べて、肯定表情のほうが高く、しかめ面認知の尺度得点に関しては、中性表情や肯定表情に比べて、否定表情のほうが高かった。したがって、肯定表情・否定表情として用いた表情刺激の操作は妥当であったと判断された。

認知された感情の程度の比較

相手の感情、自分の感情ともに、「楽しい」得点と「うれしい」得点の合計を「楽しい・うれしい」感情得点、「イライラしている」得点と「怒りを感じている」得点の合計を「イライラ・怒り」感情得点とした[6]。

会話実験中の表情および感情の認知に関する尺度得点について、対人不安特性の高さ(高群・低群)を参加者間要因、提示表情(中性表情・否定表情・肯定表情)を参加者内要因とした 2 × 3 の 2 要因混合計画分散分析を行った。対人不安特性および提示表情別にみた各尺度得点の平均点と標準偏差とを Table 2〜5 に示す。いずれの尺度得点においても、提示表情の主効果は有意であったが(相手の「楽しい・うれしい」感情の認知: $F(2, 74) = 86.78$, $p < .01$; 相手の「イライラ・怒り」感情の認知: $F(2, 72) = 24.29$, $p < .01$; 自分の「楽しい・うれしい」感情の認知: $F(2, 72) = 52.37$, $p < .01$; 自分の「イライラ・怒り」感情の認知: $F(2, 74) = 5.12$, $p < .01$)、対人不安特性の主効果と交互作用は有意ではなかった(Fs < 1)。

Table 2 相手の「楽しい・うれしい」に関する各表情における対人不安特性別の平均値と標準偏差

		中性表情	否定表情	肯定表情
対人不安	平均	4.32	4.05	7.14
高群	標準偏差	1.52	1.49	1.01
対人不安	平均	4.29	4.24	7.53
低群	標準偏差	1.36	1.83	1.14

Table 3 相手の「イライラ・怒り」に関する各表情における対人不安特性別の平均値と標準偏差

		中性表情	否定表情	肯定表情
対人不安	平均	5.14	4.59	7.23
高群	標準偏差	1.66	1.80	1.41
対人不安	平均	5.63	5.06	7.31
低群	標準偏差	1.83	1.98	1.26

Table 4 自分の「楽しい・うれしい」に関する各表情における対人不安特性別の平均値と標準偏差

		中性表情	否定表情	肯定表情
対人不安	平均	3.81	4.86	2.90
高群	標準偏差	1.65	2.25	1.19
対人不安	平均	3.65	4.71	2.76
低群	標準偏差	0.97	1.93	1.11

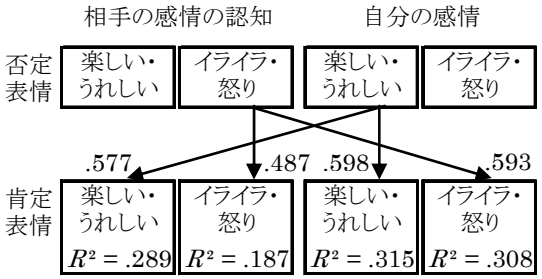
Table 5 自分の「イライラ・怒り」に関する各表情における対人不安特性別の平均値と標準偏差

		中性表情	否定表情	肯定表情
対人不安	平均	2.86	3.55	2.77
高群	標準偏差	1.18	1.90	1.17
対人不安	平均	2.82	3.35	2.71
低群	標準偏差	0.92	1.08	1.36

多重比較(HSD 法: 5%水準)の結果、相手および自分の「楽しい・うれしい」感情に関しては、中性表情や否定表情に比べて肯定表情のほうが高かった。相手の「イライラ・怒り」感情の認知に関しては、肯定表情よりも中性表情が、中性表情よりも否定表情のほうが高く、自分の「イライラ・怒り」感情の認知に関しては、中性表情や肯定表情に比べて否定表情のほうが高かった。

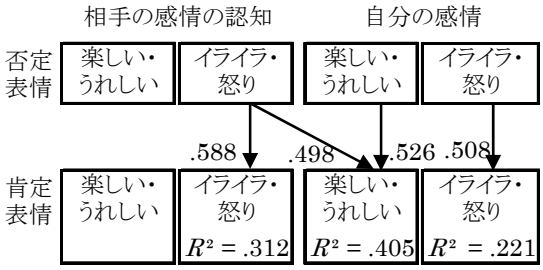
前の表情が後の表情に及ぼす影響

否定表情が提示された際の相手の感情(「楽しい・うれしい」、「イライラ・怒り」)に対する認知と、自分の感情(「楽しい・うれしい」、「イライラ・怒り」)に対する認知とが、その後に肯定表情が提示された際の相手の感情と自分の感情に対する認知にどのように影響するかを検討するために、パス解析を行った。パス解析は、対人不安特性の高低別に、否定表情が提示された際の相手の感情と自分の感情の認知を説明変数とし、肯定表情が提示された際の相手の感情と自分の感情の認知を従属変数とする重回帰分析(変数増加法: 標準偏回帰係数の有意性(5%)を基準として変数の投入を打ち切った)を行った(Figure 1、2)。



註: 数字はパス係数、実線は 5%水準で有意な正のパス

Figure 1 否定表情における感情認知が肯定表情における感情認知に与える影響のパス図(対人不安高群) $n = 17$



註: 数字はパス係数、実線は 5%水準で有意な正のパス

Figure 2 否定表情における感情認知が肯定表情における感情認知に与える影響のパス図(対人不安低群) $n = 22$

分析の結果、対人不安高群において、2 時点での同じ感情の認知に対する影響としては、否定表情が提示された際の相手の「イライラ・怒り」感情の認知が、肯定表情が提示された際の相手の「イライラ・怒り」感情の認知に正の影響を及ぼし、否定表情が提示された際の自分の「楽し

い・うれしい」感情の認知が、肯定表情が提示された際の自分の「楽しい・うれしい」感情の認知に正の影響を及ぼしていた。また、2 時点での異なる感情の認知に対する影響としては、否定表情が提示された際の相手の「イライラ・怒り」感情の認知が、肯定表情が提示された際の自分の「イライラ・怒り」感情の認知に正の影響を及ぼし、否定表情が提示された際の自分の「楽しい・うれしい」感情の認知が、肯定表情が提示された際の相手の「楽しい・うれしい」感情の認知に正の影響を及ぼしていた。

一方、対人不安低群において、2 時点での同じ感情の認知に対する影響としては、否定表情が提示された際の相手の「イライラ・怒り」感情の認知が、肯定表情が提示された際の相手の「イライラ・怒り」感情の認知に、否定表情が提示された際の自分の「楽しい・うれしい」感情が、肯定表情が提示された際の自分の「楽しい・うれしい」感情の認知に、否定表情が提示された際の自分の「イライラ・怒り」感情の認知が、肯定表情が提示された際の自分の「イライラ・怒り」感情の認知に、それぞれ正の影響を及ぼしていた。また、2 時点での異なる感情の認知に対する影響としては、否定表情が提示された際の相手の「イライラ・怒り」感情の認知が、肯定表情が提示された際の自分の「楽しい・うれしい」感情の認知に正の影響を及ぼしていた。

考察

本研究の目的は、コミュニケーション相手の表情が変化する対人場面において、対人不安特性の高さが表情認知に与える影響を検討することであった。

表情変化場面において認知される感情の程度

各表情を示された際のコミュニケーション相手の感情、自身の感情について、高対人不安者と低対人不安者との比較を行った。その結果、対人不安高群・低群との間に各表情を示された際の相手の感情や自分の感情の差はみられなかった。すなわち、本研究で用いた実験状況においては、高対人不安者と低対人不安者とでは相手の表情が変化するコミュニケーション場面で相手の感情や自分の感情に差がないことが明らかになった。したがって、本研究の仮説 1 は支持されなかった。

この結果は、Philippot & Douilliez(2005) や Merckebach et al.(1989)の実験結果とは一致する。しかし、Melfsen & Florin(2002)や Mohlman et al.(2007)の実験結果とは一致せず、Lucock & Salkovskis(1988)や Alden et al.(2007)の調査結果とは整合しない。

対人不安特性の高低による表情認知の差がみられなかった原因としては、以下の 3 点の理由により、表情認知に対人不安特性の影響が反映されにくかったためと考えられる。第 1 は、実験参加者が実験状況に十分に慣れていない状況で実験を行った可能性である。そのため、実験参加者の不安や緊張が一様に高まり、高対人不安者と低対人不安者との間に状態的な対人不安の差がなくなったと考えられる。第 2 は、コミュニケーション相手との関係性が限定されていた可能性である。表情刺激として用いた人物は実験参加者にとって面識がなく、今後も関係をもつ可能性が低い人物であった。そのため、関係の継続の可能性や必要性が低く、相手とコミュニケーションを行うのはその場のみであったため、対人不安特性の影響が表情認知に現れにくかったと考えられる。第 3 は、実験参加者の役割が明確であった点である。本研究では、「実験参加者の役割」として他者とのコミュニケーションが行われた。そのため、役割が明確ではない普段のコミュニケーション場面よりも対人不安特性の影響を受けにくかったと考えられる。

表情変化場面において前の表情が後の表情に及ぼす影響

否定表情が提示された際の相手の感情(「楽しい・うれしい」、「イライラ・怒り」)に対する認知と、自分の感情(「楽しい・うれしい」、「イライラ・怒り」)に対する認知とが、その後に肯定表情が提示された際の相手の感情と自分の感情に対する認知に与える影響を検討した。その結果、コミュニケーション相手に否定表情を示された際に認知した相手の否定感情(「イライラ・怒り」)の強さが、コミュニケーション相手の表情が肯定表情に変化した際に自身に生じる感情に与える影響が、高対人不安者と低対人不安者とで異なっていた。低対人不安者は、否定表情を示された際に認知した相手の否定感情が強いほど、その後肯定表情を示された際により肯定的な感情を抱いた。一方、高対人不安者においては、否定表情を示された際の相手の否定感情の認知は肯定表情を示された際の自身の肯定感情に影響を与えず、自身の否定感情を促進していた。したがって、仮説 2 は支持された。

加えて、否定表情を示された際に感じた自分の肯定感情の強さが肯定表情に変化した際の相手の肯定感情の認知に与える影響が、高対人不安者と低対人不安者とで異なることが示された。高対人不安者は、コミュニケーション相手に否定表情を示された際に肯定感情を感じたほど、その後肯定感情を示された際にその相手の肯定感情を感じた。一方、低対人不安者は、コミュニケーション相手に否定表情を示された際に感じた肯定感情の程度はその後の相手の肯定感情の認知に影響を与えなかった。

以上の結果から、高対人不安者と低対人不安者とでは対人場面において、ある表情を示された際の自他の感情認知がその前の表情における自他の感情認知から受ける影響が異なることが明らかになった。

低対人不安者は、否定表情を示された際に相手の否定感情を強く感じたほど、肯定表情に変化したことに対し肯定感情をより強く感じた。これは、低対人不安者が他者表情の否定表情から肯定表情への変化を「好転」と捉えたためであると考えられる。一方、高対人不安者では、否定表情を示された際に感じた相手の否定感情は、肯定表情に変化した際に自身に生じる肯定感情を強めなかった。これは、高対人不安者が他者表情の否定表情から肯定表情への変化を「好転」と捉えなかったためであると考えられる。

この結果は、Alden et al.(2007)や Mogg et al.(2004)から考察される。本研究で用いた場面は、コミュニケーション相手の表情が否定表情から肯定表情へと変化する場面であり、最終的には肯定表情を示される肯定的な対人状況であった。低対人不安者は肯定表情への変化を素直に受け入れ、本研究の対人状況について肯定表情を中心に解釈したため、否定表情から肯定表情への変化を「好転」と捉えたと考えられる。しかし、高対人不安者は否定表情から肯定表情への変化を「好転」と捉えなかった。この原因としては、高対人不安者のもつ以下の 2 つの特徴が考えられる。第 1 は、肯定的な対人状況を素直に受け入れず、疑いをもちやすいという特徴(Alden et al., 2007)であり、第 2 は、否定的な対人刺激に対して注意を向けやすいという特徴(Mogg et al., 2004)である。この 2 つの特徴により、高対人不安者は肯定表情を示された際に「肯定的な対人状況に変化した(好転した)」と素直に受け取らず、その前の否定表情の際に認知した相手の否定感情によって肯定的な対人場面(肯定表情)に対する疑いを強めたと推測される。また、否定表情への注意の高さから、本研究の対人状況について否定表情を中心に解釈したと推測される。

加えて、高対人不安者は、否定表情を示された際に相手の否定感情を強く感じたほど、肯定表情に変化しても自身に否定感情が生じ、否定表情を示された際に自分が肯定感情を感じていないと、肯定表情に変化しても相手の肯定感情を感じなかった。なぜこのような影響がみられたのかは、関連する研究知見が乏しく明確にすることができない。しかし、高対人不安者において、変化前の自他の感情が、変化後の同種の他自の感情に影響するという新たな知見を得られたと考えられる。

まとめ

本研究では、高対人不安者と低対人不安者との間に、表情が変化する場面において認知される相手や自分の感情の程度に差はみられなかった。しかし、高対人不安者と低対人不安者とでは、表情が変化する場面において、変化前の表情における認知が変化後の表情における認知に与える影響が異なることが明らかになり、高対人不安者が肯定的な変化を受け入れにくいことが示唆された。従来の研究(Melfsen & Florin, 2002; Mohlman et al., 2007; Philippot & Douilliez, 2005)では、一時点における表情認知を検討するのみであり、時間経過の中で表情が変化することを考慮に入れていなかった。したがって本研究は、高対人不安者の表情認知研究に、ある時点における表情認知がその後の表情認知に与える影響の差異という新たな知見を与えたと考えられる。

今後の課題

本研究の実験状況では、対人不安特性が表情認知に対して影響しにくかった可能性が考えられる。今後の研究では、高対人不安者が問題を抱える対人場面の特徴を、実験状況により反映させる必要がある。

また、本研究の結果から、高対人不安者は相手の感情の肯定的な変化を受け入れにくい傾向をもつと考えられる。そしてこの傾向により、高対人不安者は相手の表出感情が否定から肯定へと変化する場面において、その相手に対して不適切に反応してしまうことが示唆された。さらに、高対人不安者は、この不適切な反応により、コミュニケーション相手が一時的に否定感情を表出しただけでその関係を壊してしまったり、あまり関係が良好ではなかった相手との関係改善のチャンスを逃してしまったりすると予想される。したがって、今後は対人場面における反応や対人関係もあわせて検討される必要がある。

引用文献

Alden, L. E., Taylor C. T., Mellings, T. M., & Laposa, J. M. (2007). Social anxiety and the interpretation of positive social events. *Journal of Anxiety Disorders*, 22, 577-590.

Amir, N., Beard, C., & Bower, E. (2005). Interpretation bias and social anxiety. *Cognitive Therapy and Research*, 29, 433-443.

Amir, N., Foa, E. B., & Coles, M. E. (1998). Negative interpretation bias in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, 36, 945-957.

Clark, D. M., & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. In R. Heimberg, M. Liebowitz, D. A. Hope & F. R. Schneier (Eds.), *Social phobia: Diagnosis, assessment and treatment*. NewYork: Guilford Press. pp. 69-93.

Greco, L. A., & Morris, T. L. (2005). Factors influencing the link between social anxiety and peer acceptance: Contributions of social skills and close friendships during middle childhood. *Behavior Therapy*, 36, 197-205.

石川利江・佐々木和義・福井 至 (1992). 社会的不安尺度 FNE・SADS の日本版標準化の試み 行動療法研究, 18, 10-17.

金子一史・本城秀次・高村咲子 (2003). 自己関連づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連 パーソナリティ研究, 12, 2-13.

La Greca, A. M., & Lopez, N. (1998). Social anxiety

among adolescents: linkages with peer relations and friendships. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 26, 83-94.

Lucock, M. P., & Salkovskis, P. M. (1988). Cognitive factors in social anxiety and its treatment. *Behaviour Research and Therapy*, 26, 297-302.

Melfsen, S., & Florin, I. (2002). Do socially anxious children show deficits in classifying facial expressions of emotions? *Journal of Nonverbal Behavior*, 26, 109-126.

Merckelbach, H., Hout, W., Hout, M. A., & Mersch, P. P. (1989). Psychophysiological and subjective reactions of social phobics and normals to facial stimuli. *Behaviour Research and Therapy*, 27, 289-294.

Mogg, K., Bradly, B. P., & Philippot, P. (2004). Selective attention to angry faces in clinical social phobia. *Journal of Abnormal Psychology*, 113, 160-165.

Mohlman, J., Carmin, N., & Price, R. B. (2007). Jumping to interpretations: Social anxiety disorder and the identification of emotional facial expressions. *Behavior Research and Therapy*, 45, 591-599.

落合萌子 (2007). 対人不安が表情認知に与える影響 ―表情の文脈の影響― 日本心理学会第 71 回大会発表論文集, 118.

Philippot, P., & Douilliez, C. (2005). Social phobics do not misinterpret facial expression of emotion. *Behavior Research and Therapy*, 43, 639-652.

Rapee, R. M., & Heimberg, R. G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behavior research and therapy*, 35, 741-756.

佐々木 淳・菅原健介・丹野義彦 (2001). 対人不安における自己呈示欲求について ―賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との比較から― 性格心理学研究, 9, 142-143.

Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.

調 優子・高橋靖恵 (2002). 青年期における対人不安意識に関する研究 ―自尊心、他者評価に対する反応との関連から― 九州大学心理学研究, 3, 229-236.

Walters, K. S., & Inderbitzen, H. M. (1998). Social anxiety and peer relations among adolescents: testing a psychobiological model. *Journal of Anxiety Disorders*, 12, 183-198.

註

1) 本研究は、第一著者の卒業論文(平成 18 年度筑波大学第二学群人間学類)の一部にデータの追加・加筆・修正を行ったものである。なお本研究の一部は、日本社会心理学会第 48 回大会において発表された。

2) 提供者の選定理由は、以下の 2 点である。第 1 に、この提供者は、サークル活動において、映画作品などの製作の際に登場人物として演技を多く行っている。そのため、表情のコントロールに慣れていると考えられた。第 2 に、この提供者は、対象者(大学生)と同じ年代である。そのため、実験参加者に「同じ実験参加者である」と感じさせやすいと考えられた。

3) 本研究では、表情刺激としてあらかじめ録画した映像を用いた。この場合、実験参加者の言動に対する相手(表情刺激)側の応答のズレが生じる可能性がある。このズレを実験参加者に認識されづらくするために、静止画が切り替わっていく刺激を用いることとした。

4) 抜粋した具体項目は「集団の中に入ると、落ち着かなくなることが多い」、「大勢の集団の中では、めったにくつろぐことがない」、「大勢の集団に近づいて仲間入りするのは、避けようとする」、「知らない人たちの中にいると、いつも居心地が悪い」、「人を避けたいと思うことがよくある」、「私は引っ込み思案になりがちである」、「集団の中でも、いつもリラックスしている」、「よく知らない人たちといると、いつも神経過敏になる」、「人を避けたいとは特に思わない」、「公式の社会的場面を避けようとする」、「誰かほかの人と一緒にいても、リラックスできる」、「非常に社会的に振舞わなければならないような状況は避けようとする」であった。

5) 本実験では、分析対象となる実験参加者が 39 名と少ないことから、実験参加者の SADS の回答に偏りが生じる可能性が考えられた。そこで、本実験の参加者と同一の大学に所属する大学生 395 名を対象として質問紙調査を行った落合(2007)における SADS の平均値(3.21)に基づいて、本実験の参加者を群分けした。

6) 中性表情・否定表情・肯定表情におけるそれぞれの感情得点を合計し、各合計得点間の相関を算出した。相手の「楽しい」の合計得点と「うれしい」得点の相関は.58、相手の「イライラしている」得点と「怒りを感じている」得点の相関は.70、自分の「楽しい」得点と「うれしい」得点の相関は.63、自分の「イライラしている」得点と「怒りを感じている」得点の相関は.76 であった。

How high social anxiety individuals recognize changing facial expressions

Moeko OCHIAI (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba*)
Yutaka MATSUI (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba*)

This study examined how high social anxiety individuals (HAS) recognize facial expression changing from negative one to positive one. Participants (43 females) were asked to introduce themselves to experimental confederate about three themes. Confederate's facial expressions were changed. Confederate showed neutral facial expression at the first theme, negative one at the second and positive one at third. Participants rated recognized confederate's emotions and own emotions after each theme. As a result, there were no differences between HAS and low social anxiety individuals (LAS) in intensity of recognized emotions and own emotions. But there were differences between them in effect of emotions at negative facial expression on subsequent emotions at positive facial expression. While in HAS recognized negative emotion at negative facial expression promoted own negative emotion at positive facial expression, in LAS it promoted own positive emotion at positive facial expression. Results indicated that individuals with high social anxiety could not receive positive change of facial expression.

Keywords: social anxiety, change of facial expression, facial expression recognition, emotion.